



**University of
Zurich**^{UZH}

**Zurich Open Repository and
Archive**

University of Zurich
University Library
Strickhofstrasse 39
CH-8057 Zurich
www.zora.uzh.ch

Year: 2016

Shinwa no akuchuaritî

Steineck, Raji C

Other titles:

Posted at the Zurich Open Repository and Archive, University of Zurich

ZORA URL: <https://doi.org/10.5167/uzh-124399>

Journal Article

Published Version

Originally published at:

Steineck, Raji C (2016). Shinwa no akuchuaritî. *Journal of Social Aesthetics*, (3):1-11.

神話のアクチュアリティー

シュタイネック ラジ

2016年3月

社 藝 堂

神話のアクチュアリティ

シュタイネック ラジ

1. はじめに——過去の神話、現代の神話

「神話は過去のものだ」。今の時代も神話の時代だというならば、おそらくそれは常識外れといわれるだろうし、あるいは妙なロマンチズムの表れと受け止められるにちがいない。今の時代の常識では、「神話」は「虚偽」や「嘘」と同義語である。いわゆる「安全神話」は、その一例だ。「神話」と聞けば、これを信じないし、神話を信じるのは時代遅れ、無知蒙昧、未開な精神の表れとされるのが常である。もともと、だれも「嘘だ」と思わない現代の神話もある。たとえば、マリリン・モンローの神話。あるいは、アインシュタインの神話。モンロー神話を「信じている」人もいなければ、「疑っている」人もほとんどいないだろう。つまり、彼女を信じなくても、また彼女がメディアによって創作された存在だと分かっている、それに人は動かされる。それが現代の神話のありかたであって、昔の人は神話を信じていたが、啓蒙された現代人はそれを信じなくても、それに動かされるというかもしれないが、事はそう簡単に片付けられない。というのも、はるか過去の産物である『日本書紀』のなかにさえ、しかも典型的な日本古代神話であるイザナギ・イザナミの挿話にさえも、次のようなコメントが見られるからである。

其の泉津平坂に、^{よもつひらさか}ある^{ある}いは、^{いはゆる}所謂泉津平坂は復別に^{またこと}処^{ところ}所有らず、^{ただみまか}但死るに臨みて^{いきた}氣絶ゆる^{きは}際、^{これ}是が謂かといふ、…

イザナギとイザナミが別居するところ、すなわち泉津平坂は、現にある

場所ではなく、死にゆく過程の中の「息絶え」の比喩だという。こういう文章が書かれたことは、少なくとも典型的なこの日本の神話を編集した古代の有識者の中に、同挿話を現実の描写と信じていなかった人がいた、ということを示している。にもかかわらず、古代日本の国家の中でこの挿話を含む「神代記」が神話として機能していたことに、疑いの余地はない。神話は、信じられているか信じられていないかを問わず、機能しうる。それも神話のあり方なのだ。そう考えてみれば、「神話は過去のものだ」という、現代の常識自体、或る類の神話に基づいていることになる。なおかつ、それこそ、現代が信じている神話である。つまり近代以前の蒙昧の時代、人々の批判精神は乏しく、神話と迷信に心を惑わされたが、近代の科学革命により、神話の虚偽性が明らかになり、神話は人の心を奪えなくなった。だからこそ、近現代の人は古い時代の神話を文学、または原始古来の精神の表現として認識し、また享受することもできる。けれども、それは古い無明・混沌の時代に英雄が光をもたらし、あるべき秩序を築くという、典型的な神話の話型をとった物語にほかならない。しかもこの物語は、単なる過去への蔑視あるいは先入見を導く「空想」ではなく、近現代の知識や社会秩序を構造化する、きわめて大きな力を持った「近代の基本構築」(ラトゥール のいう modern constitution) と結びついている。アインシュタインの神話も、その具体例だ。つまり、現実の現代科学は個人の発明というより、厳密に組織化された研究グループと各研究者間の議論と協力に基づいているにもかかわらず、人々の目には、偉大な発明者(もし彼が「孤高の研究者」という雰囲気をもとていれば、なおのこと相応しいだろう)だけが科学を進歩させるもの、と映る。アインシュタインはこうした発明者の典型というわけだ。のみならず彼が受けたノーベル賞も、この「科学の神話」を構造化する。これは、イメージ(または空想)だけの問題ではない。ノーベル賞の賞金も空想ではないし、ノーベル賞を受けるための大学の努力(大学内の組織化、人材と予算の運営などを含む)も、明らかに現実的な行動である。またそれを支えているのは、大

学運営者の或る意味のリアリズムにちがいない。

こうして見ると、現代の社会は神話を超克した社会ではなく、神話に動かされながら、神話に対して無自覚な社会だというべきであろう。しかもその背後には、「神話は過去のものだ」という神話の神話を裏打ちする不適切な神話の概念も働いている。以下ではまず、この神話概念の吟味から議論を展開しよう。

2. 神話の概念

近現代のいわゆる伝統的な神話概念(上で述べた神話の神話に密接に結びつく神話概念)は、たとえば国語大辞典の神話の語義説明に明確に表れている。

原始人・古代人・未開社会人などによって、口伝や筆記体で伝えられた、多少とも神聖さを帯びた物語で、宇宙の起源、超自然の存在の系譜、民族の太古の歴史物語を含むもの。その起源は、自然現象を擬人的に解釈しようとしたことや、人類に共通な無意識・下意識の欲求を投影したことにある。たとえば、ギリシア神話や、日本の「古事記」にある神話のたぐい³⁾。

この説明は、神話の構造的な特徴を明かにする部分と、神話を近現代の自己意識に沿って過去に投影する(または過去に閉じ込める)部分とを含んでいる。「神聖さをおびた物語」や「現象の擬人的な解釈」などが前者であり、原始人・古代人・未開社会人といった言葉を羅列した言及が、後者である。

国語大辞典の語義説明に対比する意味で、戦後日本の神話研究の代表者・大林太郎の神話概念を挙げてみよう。大林は近代の民俗学の神話概念を継承しながらも、次のように、完全に構造的な説明を行っている。

…神話が真実であると考えられている報告であること、神話的行為が行われたときは形成的な原古であって、このときにすべての本質的なものが基礎づけられ、今日の事物や秩序が作られたこと、また神話は存在するものをたんに説明するばかりでなく、同時に一回的な原古の出来事によって基礎づけ、証明するものであること、さらに神話で語られている原古の出来事は、後の人間がまもるべき範型を提示しており、今日でも関心の対象であるから、その意味では時間をこえた永遠のものであること…⁴⁾。

「神話が真実であると考えられている報告である」という点は、しばらく措く。大林が述べている、それ以外の神話の特徴は、今でも認められる。ただ念頭に置かなければならないのは、彼によって「原古」と呼ばれている時代が、必ずしも歴史上の「原始古代」ではなく、あくまで神話上の原古であること、つまり、神話の物語によって原古として規定された或る時代であることだ。たとえば、『日本書紀』に語られる仏法伝来・聖徳太子の神話に扱われている「原古」は、『日本書紀』の執筆時代より一世紀前の時代を指している。

船田淳一は、中世神話を紹介するにあたって、流動化されたともいえるその神話観を次のように規定している。

…神話とは物事の＜起源＞を明かす物語であり、現実の有り様を遥かなる過去へと遡及することで説明する思考の様式なのであって、それは一個の人間の＜生＞にとっても必要であるだけでなく、共同体や民族・国家にとっても実に不可欠な、聖なる出来事であり歴史の物語に他ならない。人間社会が常に神話とともにあり、その社会の歴史的変動は神話の変容に照応するのであって、決して神話は固定的ではない⁵⁾。

ただ大林が指摘しているように、神話が現在の社会の有り様を「説明する」ことだけでなく、人間が守るべき規範を指定していることも忘れてはならない。

以上とりあげた文献の主なポイントをまとめると、神話は目の前の現実のなかで、或る関心事を選別し、そのあるべき様子の基本を「原始」とされる過去の物語に探る、ということになる。

3. 神話の構造

こうした神話理解をベースにすれば、基本的な二重構成が神話に属していることがわかる。つまり神話は、物語自体（以下では「神話物語」と呼ぶ）と、この物語を現実と結びつける言説（神話言説）の二つの部分からなっていて、或る物語を「神話」たらしめるのは後者の「言説」にほかならない。

ここでいう「言説」は非常に広義なものとしてとらえなければなるまい。それは、必ずしもストレートな、明示的な発言ではない。さらに言葉による説明を核心としている必要もない。たとえば、儀式もそういう意味での神話的言説と考えてよい。20世紀前半に展開された「儀式と神話」論は、神話物語を儀式の内容的「説明」ととらえたが、逆に儀式が或る過去の物語に対して、現実世界を維持する役割を与えているとも、いえるだろう。一方、かなり抽象的な学術論文も、よく見れば神話の言説部分にあたることもありうる。たとえば磯前順一が指摘したように、いわゆる「記紀神話」を「日本神話」——この場合は、「日本人の意識のあり方を表している古典」——として振興しつづける諸言説の中では、「記紀論」という学術論文のジャンルが、今なお不可欠な一部を占めている⁶⁾。

物語とそれを現実と結びつける言説とからなる神話の二分構成には、ちょうど神話の時間の二重構造が対応する。あらゆる神話は「今の時間」を「原始の時間」（大林の「原古」）から区別し、「今」の根拠を「原始」

に探る。ここで大事なものは、「今」と「原始」の量的な間隔より、その質的な差異である。要するに「原始」は、「今」を根拠付けるパワーを持っている時間と考えられ、逆に「今」はそういうパワーがなく、「原始」の生成的な、または形成的なパワーに依存して成り立っているものと、されるのである。この違いは、あくまで質的な違い、しかも神話の構造上の違いとしてとらえなければならない。つまり、いわゆる「原始」は神話物語の時間で、「原始」のパワーも神話物語・言説により設定されたものだと考えた方が適切であろう。これに対して、「物語の時間」としての「原始」と「今」との外延的な関係はかなりフレキシブルで、究極的にいえば、重なっても全く問題はない。いい換えれば、神話の構造からすると、どの時代でも「原始」たりうる。「原始」を過去に置くか、現在に置くか、場合によって未来に置くか——それは神話物語と神話言説の関係次第なのであって、このことによって神話を分類することもできるだろう。ただ、「原始」が「今」と外延的に重なっている場合、神話物語に積極的に参加している限りでの現在がその「原始」を分有し、それ以外の現実はすべて、既に生きるパワーを失った「なくなるべき現在」、あるいは「変わらざるべき現在」と、規定される。いずれにしても、おそらくどんな神話も、「現在」が神話物語を分有している以上、「原始」のパワーが或る程度、これに加わってくるものと想定されよう。

或る物語が神話たりうるため、それを現在の関心事と結びつける神話言説が必要不可欠であるのは、以上既に述べてきたとおりである。しかしながら、神話の重心が神話物語にあるといっても、異論はあるまい。なおかつ、神話物語の構造をなによりも決定しているのは、その中心をなしている語られる行為である。古代ギリシアの専門家ブルケルトが指摘しているように、神話は人間の或る基本的な行為をベースにし、神話のストーリーはこの行為の各段階に分節される。たとえば、多くの神話のストーリーのベースにある「探求」のパターンは、ブルケルトによれば「入手」の行為に基づいている。この「入手」行為が包容する各段階について、ブルケル

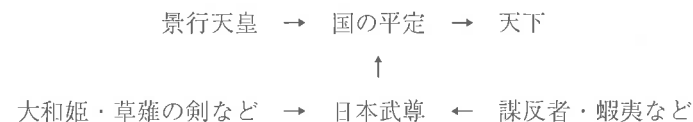
トは次のように説明している。

To 'get' something means: to realize some deficiency, or receive some order to start; to have, or to attain, some knowledge or information about the thing wanted; to decide to begin a search; to go out, to meet partners, in a changing environment, who may prove to be helpful or antagonistic; to discover the object, and to appropriate it by force or guile, or, in more civilized circumstances, by negotiation; then, to bring back the object, while it still may be taken away by force, stolen, or lost. Only after all that, with success established, has the action of 'getting' come to its end⁷⁾.

同じ「探求」の行為パターンに関して、既に言語学者グレマスが、そこに含まれた役割分担に注目し、「探求」に携わる諸行為者の次のような関係図（いわゆるアクタント・モデル）を考えている⁸⁾。



この図式を、たとえば『日本書紀』の日本武尊^{やまとたける}神話に当てはめると、次の図のようになる。



この図を見てわかるのは、物語の中に出てくるアクタントにあたるものが必ずしも人間、または人間以外の人格的な存在ではない、ということである。「客体」が姫君の他、宝物や王位や国の安寧などでありうるのは、

いうまでもないだろうが、「味方」の位を占めるのも、たとえば或る特定の事物（薬、太刀など）でもありうるし、「山」や「夜」のような自然現象でも、「階級意識」のような精神的な現象でもありうる。

そういえば、グレマスは以上のアクタント図をヘーゲルやマルクシズムが提供した世界史物語にも当てはめてみたが、それは近現代における神話的な思考に関する興味深い示唆を与えうるだろう。もっとも、すべての神話が「探求」型の神話でないこと、それ以外の行為パターンにはまた違うアクタント図式が対応することにも、十分な注意を払わなければなるまい。

4. 神話の力学

神話物語を行為パターンから考えてみると、いわゆる「神話の力学」の一番大事なポイントがわかる。つまり、現在の状況を神話言説によって神話物語と結びつけることで、状況の本質を規定し、その原点と発展段階と完成状態とともに、関与者の役割分担（アクタント位）を決めることが肝心なのだ。たとえば、日本史から一例をあげると、江戸時代の儒学者山県大弼が日本武尊を讃えた碑銘文を書いたとき、そこに「江戸幕府の武士は屈服させるべき蝦夷のようなものだ」という、いわば革命的なメッセージが潜められていたとされる⁹⁾。ちなみに大弼はその後、案の定幕府により、謀反者として処刑された。

ここに見られる神話物語と現実との神話言説上での関係付けは、後者が前者を繰り返すことにより想定される、為されるべき同一性である。神話により、現実の方向性が決められ、人の為すべき行為と役割分担が明瞭に定められる。こうした神話の力学は、神話物語を過去の現実の叙述だと信じなくても成り立ちうる。しかし、もっと究極的な神話思考もある。為されるべき同一性を成るべき同一性として捉える思考様式がそれである。ブルーメンベルグは晩年のヒトラーを例に取り上げてそれを「Präfiguration」（形容先行形成）の思想と呼んだ¹⁰⁾。これは、過去の出来事の各段階が必

ず現在に繰り替えされる故、物事の将来が予知されるという迷信である。この思考様式が神話を信じなくては成り立たないのは、いうまでもあるまい。

しかし、同じブルーメンベルグが彼の大作の一つ『神話の変奏』¹¹⁾で示したように、神話物語はかならずしも固定したものではなく、変奏の中でこそその独特な「同一性」を保ち、時代の流れや変貌を受けながらも、神話としての意義深さを示す。その場合、元の物語と、それに結びつけられる現実との間にも、変奏曲の作成に使われるような様々な構造関係——たとえば要因の逆転・拡大・縮小など——が起こりうる。こうしたときの神話言説に遊戯的な契機があってもおかしくないし、神話のもつ意味深さは、それによって妨げられることもない。

5. 神話の批判の可能性——結びに替えて

神話が、以上述べたようなものであれば、啓蒙主義の典型的な「神話批判」の限界が明らかになるだろう。というのも、神話物語の無根拠を示すだけで神話の束縛から解放されうるのは、信じられる神話の場合だけだからだ。しかも、この場合でさえ、それだけでその神話が生命力を失うわけではない。神話物語の性格を解説する神話言説が置き換えられれば、たとえ明らかに史実でない過去の物語であっても、「時代意識」や「民族意識」や「普遍的無意識」の表現として見事に再生させることができる。神話物語を（或る過去の現実の描写として）信じなくても神話が成り立ちうるならば、神話物語の無根拠を説く神話批判は、的外れであろう。あるいは、合理性の標語ですべての神話を無くそうという意図も実は不合理を含んでいる。「無限な理性」を具備しない人間は、開化した意識によってこそ外延的にも内包的にも無限性を帯びている現実が目覚める。しかも、その無限性は、或る「無意味」につながる。こうした無限なる、そして無意味なる現実の意味を与えられるのは、人間が考えた物語とそれを現在と結びつける言説である。だとすれば人間は、神話なくして世を渡れない。問わ

れるのが神話そのものの正当性というより、神話のあり方と各神話の質である。神話批判の本格的な命題はこの二つだ。神話のあり方については、こうして若干述べてきたわけだが、ここで神話の質に関してフランスの政治神話学者 Y・シトンの言葉を挙げることによって、本論を締めくくりたい。シトンは神話の両義性についてこう述べている。

それはわれわれを眠りこませると同時に、眠っているあいだにわれわれを夢見させるのであり、そのことによって始めて想像できるようになるのは、「われわれがそうであるべきなのに、けっしてそうならなかったもの」である¹²⁾。

特定の神話の批判において問われるのは、何よりも当の神話によって語られる「われわれがそうであるべき」ことの吟味である。さらに、もしもその神話が内に宿す「そうであるべき」有様のビジョンに否定的であるならば、それを置き換える別な神話を提言しなければならないだろう。何故なら、神話をただ否定するに留まるならば、人々を無意味なる現実直面させることになるからである。その無限の深淵から逃れるため、人は神話の批判者を敵視して攻撃するだろう。悪質な神話の束縛から人を解放しようとするれば、人々の味方になって共有できる新しい神話を、語らなければならない。というのも、結局のところ、神話は神話によってしか、批判できないからである。

参考文献

- 1) 『日本書紀』「神代上」。書き下し文とルビは小島憲之、『日本書紀1 日本古典文学全集 2』(小学館、1994年)、48-49頁による。
- 2) Bruno Latour, *We Have Never Been Modern*. Cambridge, Mass: Harvard University Press, 1993 (川村久美子訳『虚構の「近代」= Nous n'avons jamais été modernes: 科学人類学は警告する』、新評論、2008年)を参照。
- 3) 日本大辞典刊行会(編)『日本国語大辞典』第11巻(小学館、1974年)、273頁。
- 4) 大林太良『神話と神話学』(大和書房、1975年)、30頁。

- 5) 船田淳一「中世神話の世界」、『躍動する日本神話：神々の世界を拓く』(斎藤英喜・武田比呂男・猪股ときわ 編、森話社、2010年)、136-137頁。
- 6) 磯前順一『記紀神話と考古学：歴史的始原へのノスタルジア』(角川学芸出版、2009年)、105-111頁。
- 7) Burkert, Walter, *Structure and History in Greek Mythology and Ritual*, Berkeley: University of California Press, 1979, p.15.
- 8) Greimas, Algirdas Julien, *Sémantique Structurale: Recherche de Méthode*, Paris: Larousse, 1966, p.180 (田島宏・鳥居正文訳『構造意味論：方法の探究』、紀伊國屋書店、1988年)。
- 9) Watanabe Hiroshi, *A History of Japanese Political Thought, 1600-1901* (David Noble 訳、Tokyo: International House of Japan, 2012), pp.189-191.
- 10) Blumenberg, Hans, *Präfiguration: Arbeit am politischen Mythos*, Berlin: Suhrkamp, 2014.
- 11) Blumenberg, Hans, *Arbeit am Mythos*. Frankfurt, Berlin: Suhrkamp, 1996 (青木隆嘉訳『神話の変奏』、法政大学出版局、2011年)。
- 12) Cf. Citton, Yves, *Mythocratie: storytelling et imaginaire de gauche*. Paris: Editions Amsterdam, 2010, p.16. 日本語は白石嘉治、『『古事記』のミトクラシー』『現代思想』39, 6 (2011年5月号)、233-237頁による。シトンは音楽家サン・ラの次の言葉を引用している：“The mythocracy is what you never came to be that you *should* be. For instance, as a child you had a lot of dreams about something pure, something you wanted to be. But you let yourself get compromised by people who were saying, 'Go this way, do this.' Finally, for the sake of money, you failed. Just like America.” Fischlin, Daniel, „Improvocracy?“, *Critical Studies in Improvisation/Études Critiques En Improvisation* 8, Nr. 1 (13. Mai 2012), p.13.